筑紫女学園大学リポジト

運動・スポーツ好意者の体育授業への学習態度とその理由

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 筑紫女学園大学 公開日: 2025-04-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮平, 喬, 野田, 侑司, 堤, 公一, 西田, 明史 メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/2000083

運動・スポーツ好意者の体育授業への学習態度とその理由

宮平　喬・野田　侑司・堤　公一・西田　明史

A Comprehensive Study on the Leaning Attitudes toward P.E Classes among Students With a Positive View on Exercises and Sports

Takashi MIYAHIRA, Yuji NODA,
Kouichi TSUTSUMI, Akihito NISHIDA

キーワード：学習態度，運動・スポーツ好意者，テキストマイニング

Ⅰ　緒言

平成20年度から令和5年度の体育の楽しさに関する経年変化をみると、児童・生徒が「楽しい」「やや楽しい」と回答した割合が、小学校男子が約92％～94％、女子が約85％～91％、中学生男子が約84％～90％、女子が約73％～84％と高い割合で推移していた（スポーツ庁 2023a）。加えて、体育・保健体育の授業が楽しいと感じている児童生徒は、1週間の総運動時間が長く、体力テストの総合評価と体力合計点、卒業後の運動意欲が高かったと報告している（スポーツ庁 2023b）。 体育授業を楽しく行うことは、文部科学省が掲げる体力の向上等の目標達成に近づく必須条件だということが言える。

しかしながら、データを詳細に検証すると懸念されることも報告されている。スポーツ庁 Web 広報マガジン（2018）によると、小学5年生が90.4％、中学生の83.7％が運動・スポーツが好きと回答しているが、中学2年生の女子については21.5％が「嫌い・やや嫌い」と回答していた。また、体育・保健体育の授業以外で一週間の運動時間が60分未満の女子の割合は、小学5年生が11.6％、中学2年生が19.4％であった。こういう現状を踏まえスポーツ庁では中学校全体の16.3％にあたるスポーツ嫌いを8％まで減らす目標を立てている。

次に、卒業後の運動への意欲について、令和5年度は令和4年度と比較して、小学生男子は0.3ポイント増加したが、小学生女子は1.4ポイント減少した。また、中学生に関しては、男子が0.7ポイント増加したが、女子は1.6ポイント減少し（スポーツ庁 2023d）、中学生女子のスポーツに取り組む姿勢がクローズアップされてきた。

続けて大学生の運動・スポーツの好嫌度と運動・スポーツ実施状況との関連を報告した澤井

(2019) によると、運動スポーツ嫌いの非実施群が男子52.6%、女子52.0%であった。すなわち、運動嫌いの約半数は、運動・スポーツの実施に至っていなかった。この結果を踏まえると運動嫌いが体を動かすことの妨げになっていることは否めないだろう。この状況は、体育の目標として掲げる「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育成」と照らし合わせても好ましいとはいえず、運動・スポーツを取り扱う学校体育の役割は重要視され、さらなる研究と改善が求められる。

このような背景より、運動嫌いや体育嫌いを少しでも減らすため、文部科学省は「運動が苦手な児童」や「運動に意欲的でない児童」に対する具体例を学習指導要領に盛り込んでいる。このような取組は、運動・スポーツを好む者だけでなく嫌いな者にもフォーカスをあてた改善策であり体育授業の質を高めることに有意義である。

しかしながら、運動が好きだからといって授業を必ずしも積極的に受けるとは限らず、逆に、運動が嫌いでも授業に積極的な者もいるだろう。これまで、体育嫌いに関する分析と対策等は多くなされてきたが、運動・スポーツ好意者と体育授業への積極性の相違に焦点をあてた研究は見当たらない。特に、学習者がどのように思い、考え、行動しているのかといった知見を共有することは体育授業の改善に寄与すると考えられる。

そこで本研究では運動に好意的な学習者の体育授業に対する学習態度の特徴を明らかにすることを目的とした。ここで示す学習態度とは、主体的に取り組んでいたか否かという視点におき進めた。すなわち、「運動に好意的であり、積極的に授業に取り組んでいた者」と「運動に好意的だが、消極的に授業に取り組んでいた者」についてそれぞれ、その理由を明確にすることである。

Ⅱ　方法

1．調査期間

2023年4月中旬～5月中旬

2．調査対象

調査の対象は福岡県・佐賀県に所在する保育者・教員養成系の3大学及び短期大学部の2023年度入学生482名とした。

3．調査の収集方法

調査対象者へ研究の主旨と協力依頼について説明のうえ、質問項目をデータ変換したQRコードを配布しアンケートを実施した。アンケートの収集手段はOffice365（Microsoft社製）のFormsを用いた。アンケート調査は任意であり、本研究で知り得た情報は厳密に管理しプライバシーの配慮に注意することを伝えた。

4．調査内容

（1）言葉の定義と確認

質問に対する正確な回答を得るため、本調査では、「運動・スポーツ」ならびに「体育授業における積極的・主体的な学習行動」を以下のように定義し、研究説明書に明記するとともに、調査者が調査対象者に対して口頭で説明した。

【運動・スポーツ】

- サッカーや競泳などのように、一定のルールに従い勝敗や記録の優劣を競い合う競技だけでなく、健康の保持増進を目的とした身体活動（ウォーキング、ジョギング、ヨガ）、楽しみや生きがいのために行う身体活動（レクリエーション、運動遊び）も含まれる。

【積極的・主体的な学習行動】

- 経験の有無、得意不得意や上手下手などにかかわらず、教材となる運動・スポーツができるようになる、上手くなることを目指して全力を尽くした。
- 教材となる運動・スポーツの楽しみ方、ルールや審判の仕方、基本技術や戦術を理解するためにできる限り努力した。
- 学習したことを次の体育授業や他の教科の授業に役立てたり、普段の生活、運動・スポーツや遊びに取り入れたりしようと試みた。

（2）運動・スポーツに対する好意非好意

運動・スポーツに対する好意について尋ねた。質問内容は次の通りである。

小学校の頃、運動スポーツをすることが好きだった。小学校の頃の状況として、もっとも近いものを選択するように質問を設置した。選択肢の（まったく当てはまらない「嫌いだった」）、（あまり当てはまらない「やや嫌いだった」）、（どちらとも言えない）を非好意者とし、（多少当てはまる、「やや好きだった」）、（かなり当てはまる「好きだった」）と回答した者を好意者として位置づけ、該当するものを5件法で回答させた。同様の質問を中学校時代、高校時代における状況について尋ねた。

（3）小学校から高校までの体育授業への学習行動

体育授業の学習行動について尋ねた。質問内容は次の通りである。

小学校の体育の授業では、積極的・主体的に参加していた。小学生の頃の状況として、もっとも近いものを選択するように質問を設置した。

選択肢は（まったく当てはまらない「消極的・受動的だった」）、（あまり当てはまらない「やや消極的・受動的だった」）、（どちらとも言えない）を消極的な者とし、（多少当てはまる、「やや積極的・主体的だった」）、（かなり当てはまる「積極的・主体的だった」）と回答した者を積極的な者として位置づけ、該当するものを5件法で回答させた。同様の質問を中学校時代、高校時代における状況について尋ねた。

（4）調査内容（2）、（3）の回答の根拠となる理由等について自由記述形式で回答を求めた。

（5）調査内容（2）、（3）の回答で得た回答から以下のように分類し分析を進めた。

① 運動・スポーツに好意的であり体育授業に積極的な態度（好意積極群）

② 運動・スポーツに好意的だが体育授業に消極的な態度（好意消極群）

③ 運動・スポーツに非好意的だが体育授業に積極的な態度（非好意積極群）

④ 運動・スポーツに非好意的だが体育授業に消極的な態度（非好意消極群）

（6）分析方法

（2）と（3）の相関関係を確認するためにPearsonの相関係数より求めた。その際の有意水準を5％未満とした。さらに（4）の自由記述について、樋口（2023）が開発したKHCoder3を用いてテキストマイニングを行った。共起ネットワークでは、小中高別に「好意積極群」と「好意消極群」の外部変数を用いており、語の最小出現数を2に設定した。なお、小中学校のデータから強制抽出する語として「体育委員」「長距離走」「短距離走」「部活動」「鉄棒運動」「跳び箱運動」「器械運動」「競技・種目」を選択した。高校については、上記の語に「クラスマッチ」「体育の授業」を加えた。この分析により使用される語と語のつながりを視覚化するとともに、jaccard係数からそのつながりの強さを求めた（注1）。また、具体的な語の使われ方を確認するために、KWICコンコーダンス（注2）を用いて、学習者の態度の特徴を要約した。さらに要約した文章の内容からキーワードを導き出し命名した。キーワードの命名は、質的データの概要を知るために行った。

Ⅲ　結果

1．運動・スポーツの好意非好意別にみた体育授業時の態度の割合及び相関関係

表1は運動・スポーツの好意非好意と体育授業時の態度（消極的、積極的）をクロス集計した結果を小学校、中学校、高校別に示している。表1が示すように、小学校では運動・スポーツが好きで体育授業に対する学習態度が積極的な者が93.2％、運動・スポーツが好きで体育時の授業態度が消極的な者は、6.8％、同じく中学校では、92.8％、7.2％、高校では94.0％、6.0％となった。

運動・スポーツが好きでなく、体育時の授業態度が積極的な者が、小学校では26.5％、運動・スポーツが好きでなく、体育時の授業態度が消極的な者が73.5％となった。同じく中学校では25.9％、74.1％、高校では37.1％、62.9％となった。

運動・スポーツに対する好意非好意と体育時の学習態度の相関をみると正の強い相関関係にあった（r=0.77～0.81、p<.001）。

表1　運動・スポーツに対する感情と体育授業時における学習態度のクロス表及び相関係数

小学校		積極的態度		消極的態度		相関係数	P
		n	%	n	%		
運動・スポーツに対する感情	好意的	344	93.2	25	6.8	0.77	0.000
	非好意的	30	26.5	83	73.5		
計		374		108			
中学校		**積極的態度**		**消極的態度**		**相関係数**	**P**
		n	%	n	%		
運動・スポーツに対する感情	好意的	322	92.8	25	7.2	0.81	0.000
	非好意的	35	25.9	100	74.1		
計		357		125			
高校		**積極的態度**		**消極的態度**		**相関係数**	**P**
		n	%	n	%		
運動・スポーツに対する感情	好意的	329	94.0	21	6.0	0.79	0.000
	非好意的	49	37.1	83	62.9		
計		378		104			

2．テキストデータマイニングによる分析結果

自由記述で得られたテキストデータに形態素解析をおこなったところ、抽出後使用数（総数）は小学校4424、中学校4666、高校5024となり、異なり語使用数（総数）では小学校438、中学校532、高校542となった。共起ネットワークに利用される語の数は小学校が110、中学校が128、高校が144となった（表2）。

表２　自由記述（授業参加理由）回答の分析

		小学校	中学校	高校
テキストデータの統計情報	文	382	362	371
	段落	369	347	350
	抽出後使用数（総数）	4424	4666	5024
	異なり語使用数（総数）	438	532	542
共起ネットワーク	共起関係の種類	語－外部変数	語－外部変数	語－外部変数
	語の最小出現数	2	2	2
	利用される語の数	110	128	144

3．学校種別の評価

（1）小学校

表3より小学校体育の「好意積極群」の特徴語として、共起の強さを示す jaccard 係数を昇順すると、「好き」「楽しい」「動かす」「体」が抽出された。このような点を踏まえつつ、それぞれの語句の使われ方を検討するために共起ネットワークを描画した（図1）。図1を見ると、好意積極群と好意消極群の両者に共通して「好き」という語が多く使用されていることが確認できる。KWIC コンコーダンスで前後の文脈を確認すると、「みんなで遊ぶのが**楽し**かったから」「**体を動かす**ことが**好き**だから」といった語の使われ方をしていた。その他のテキストについても文章の意味を読み取り、要約し文章化した（表4）。表4が示しているように、「体を動かすことが好きで授業がレクリエーションのようなものが多く、遊び感覚で取り組め楽しかった」「先生が児童を楽しめるように工夫するなど指導が上手だった」「クラスみんなで協力しながら、体を動かすことが好きだった」が学習態度の特徴だった。この内容から、キーワードを「学習内容」「教師の指導力」「他者との関わり」と命名した。

表３　小学校　抽出語（jaccard 係数）

好意積極群		好意消極群	
好き	0.509	苦手	0.229
楽しい	0.387	分かる	0.120
動かす	0.299	得意	0.118
体	0.289	ルール	0.080
体育	0.098	参加	0.077
授業	0.096	運動	0.076
友だち	0.079	主体	0.074
動く	0.049	跳び箱運動	0.069
スポーツ	0.046	多い	0.056
遊ぶ	0.023	競技・種目	0.053

表４　両群のテキストから得た学習態度の要約（小学校）

	好意積極群	好意消極群
テキストの要約	体を動かすことが好きで授業がレクリエーションのようなものが多く、遊び感覚で取り組め楽しかった	自分の能力の低さや体へのコンプレックスが体育の苦手意識につながり、主体的に参加できない
	先生が児童を楽しめるように工夫するなど指導が上手だった	運動や体育は好きだが、単元によって不得手な種目があり、授業への取り組み方が、運動ができる人にまかせたり、課題をこなす感じで参加していた
	クラスみんなで協力しながら、体を動かすことが好きだった	

同様に「好意消極的」の特徴語の共起の強さとしては、「苦手」「分かる」「得意」が抽出された。KWIC コンコーダンスから、「**苦手**なものやルールがよく**分からず**どう動けば良いか**分からなかった**」「器械運動などあまり**得意**ではなかったから」という使われ方をしており、「分かる」「得意」については否定的な意味で使われていた。表4が示すように「自分の能力の低さや体へのコンプレックスが体育の苦手意識につながり、主体的に参加できない」「運動や体育は好きだが、単元によって不得手な種目があり、授業への取り組み方が、運動ができる人にまかせたり、課題をこなす感じで参加したりしていた」が学習態度の特徴だった。

苦手な単元に対して技術力が足りていないことが、消極的な態度と関係していた。この文脈からキーワードを「自己の能力」「苦手な単元」と命名した。

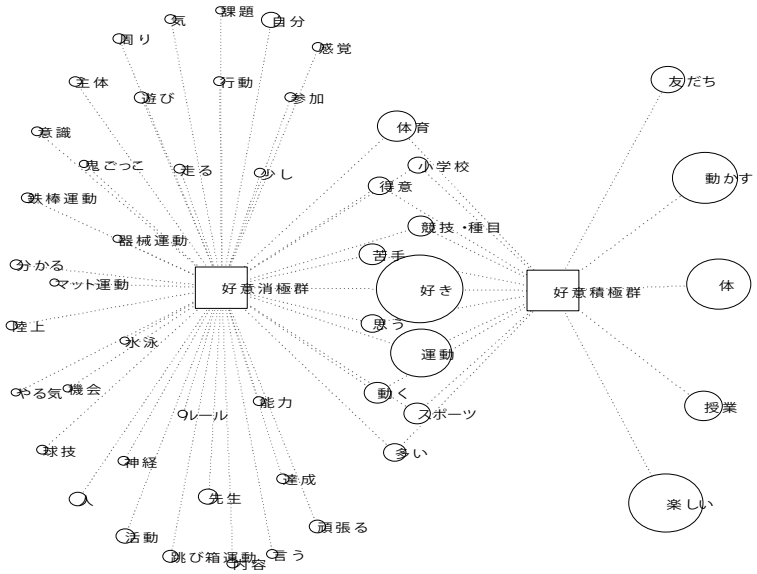

図１　両群を外部変数とした共起ネットワーク図（小学校）

（2）中学校

表5が示すように中学校体育について外部変数の「好意積極群」の特徴語として、共起の強さを示す jaccard 係数を昇順すると、「好き」「楽しい」「動かす」「体」「部活動」が抽出された。図2の共起ネットワーク図でも、確認できるように両群に共通して「好き」「楽しい」という語が多く使用されていた。また、KWIC コンコーダンスで文脈の前後を確認すると、「**部活動**に入っていて**体を動かす**ことが**好き**だったから」「選択授業が**楽しかった**」といった語の使われ方をしていた。また、表4の小学校と同様な手法で文章の要約を行い、表6に示した。

表6に示しているように、「小学校より体育の内容が多様化し専門的に学び楽しむことで、気分転換をはかったり、技術習得や好成績を残すことが積極的な活動につながった」「先生に対して、怖い、情熱的という印象を持った」「部活動で体力がついたことが自信となり、授業を楽しむことができた」「周りの友達や仲間との交流の楽しさも積極的な授業参加を後押しした」が積極的な態度の理由だった。

表５　中学校　抽出語（jaccard 係数）

好意積極群		好意消極群	
好き	0.384	多い	0.156
楽しい	0.305	苦手	0.132
動かす	0.167	感じる	0.100
体	0.161	人	0.097
部活動	0.140	動く	0.083
体育	0.087	授業	0.080
スポーツ	0.062	行く	0.080
体力	0.046	恥ずかしい	0.080
バレーボール	0.044	積極	0.077
増える	0.044	全力	0.077

表６　両群のテキストから得た学習態度の要約（中学校）

	好意積極群	好意消極群
テキストの要約	小学校より体育の内容が多様化し専門的に学び楽しむことで、気分転換をはかったり、技術習得や好成績を残すことが積極的な活動につながった	中学に入って周りとの能力差が分かるようになりミスしたり全力で取り組むことが恥ずかしいと感じ、みんなに迷惑をかけたり、雰囲気が悪くなることが嫌だった
	先生に対して、怖い、情熱的という印象を持っていた	運動することは好きだが、苦手な科目が増え、特に、集団で行う種目は精神的にも体力的にもついていけなかった
	部活動を始めて体力がついたことが、自信となり、授業を楽しむことができた	運動は好きだが、先生が嫌いだったり成績を付けられることで体育が楽しくなくなる一方で、先生の指導で積極的に種目に取り組めることもあった
	周りの友達や仲間との交流の楽しさも積極的な授業参加を後押しした	

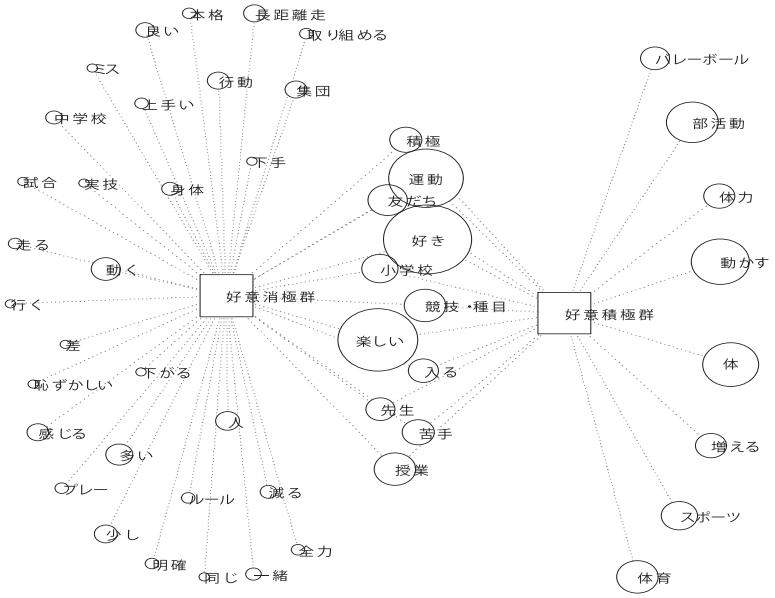

図２　両群を外部変数とした共起ネットワーク図（中学校）

これらの文脈から、キーワードを「教師との相性」「他者との関わり」や「部活動の介入」と命名した。

同様に「好意消極群」の特徴語の共起の強さとしては、「多い」「苦手」「感じる」であった。KWIC コンコーダンスを用いたところ、「**苦手**な競技・種目が**多かった**から」「運動できる人との差を**感じて**控えめになっていた」という使われ方をしており、表6で示したように、「中学に入って周りとの能力差が分かるようになり、ミスしたり全力で取り組むことが恥ずかしいと感じ、み

んなに迷惑をかけたり、雰囲気が悪くなることが嫌だった」「運動をすることは好きだが、苦手な科目が増え、特に集団で行う種目は精神的にも体力的にもついていけなかった」「運動は好きだが、先生が嫌いだったり成績をつけられることで、楽しくなくなる一方で先生の指導で積極的に種目に取り組めることもあった」が消極的な学習態度の理由であった。この文脈から、キーワードを「苦手な単元」「他者に対する意識」「教師との相性」と命名した。

（3）高校

表7が示すように高校体育について外部変数の「好意積極群」の特徴語として、共起の強さを示す jaccard 係数が大きい順でいうと、「楽しい」「好き」「運動」「授業」「動かす」「体」「競技」「種目」が抽出された。図3の共起ネットワーク図でも、確認できるように両群に共通するのは「積極」という語のみで、他は好意消極群に多く出現し強い結びつきがあった。

KWIC コンコーダンスを用いて文脈の前後を確認したところ、「**好きな競技・種目**が多かったから」「体育の**授業**で**体を動かして**息抜きをしていたから」といった語の使われ方をしていた。また、表4、5と同様な手法で文章の要約を行い、表8に示した。表8に示しているように、「高校の体育は多くの選択科目が設けられ、勉強の息抜きにもなった」「周りが一緒に楽しく全力で取り組んだり、普段交流がない人とコミュニケーションをとることがあって楽しかった」「部活動に専念し体が鍛えられたことで運動が好きになり、体育の時間が楽しく感じた」が学習態度の特徴だった。この文脈から、キーワードを「勉学との関わり」「他者との関わり」「部活動との関わり」と命名した。

同様に「好意消極群」の特徴語の共起の強さとしては、「周り」が挙げられた。KWIC コンコーダンスから、「体育は楽しかったけど**周り**の友達と協力することはあまりできていなかった」という使われ方をしており、表8で示したように、「勉強が忙しく疲れたくないし、小中学より単元の内容が難しいので上手にできない時は楽しくなく、バスケットボールなどの好きな種目は**積極**的だが、長距離走など**苦手**な運動の時は遠慮して動いた」「体育は好きだけど、クラスの雰囲

表7　高校　抽出語（jaccard 係数）

好意積極群		好意消極群	
楽しい	0.363	周り	0.100
好き	0.352	中学校	0.098
運動	0.19	恥ずかしい	0.095
授業	0.146	積極	0.083
動かす	0.146	長距離	0.083
体	0.139	女子	0.080
競技	0.124	走る	0.077
種目	0.124	参加	0.071
活動	0.1	苦手	0.069
自分	0.1	思う	0.063

表8　両群のテキストから得た学習態度の要約（高校）

	好意積極群	好意消極群
テキストの要約	高校の体育は多くの選択科目が設けられ、勉強の息抜きにもなった	勉強が忙しく疲れたくないし、小中学より単元の内容が難しいので楽しくなかった。バスケットボールなどの好きな種目は積極的だが、長距離走など苦手な運動の時は遠慮して動いた
	周りが一緒に楽しく全力で取り組んだり、普段交流がない人とコミュニケーションをとることがあって楽しかった	体育は好きだけどクラスの雰囲気になじめず、周りにあわせることがあった
	部活動に専念し体が鍛えられたことで運動が好きになり体育の時間が楽しく感じた	部活動のおかげで体力がつき、授業についていけたが部活動の練習がきついため体力の消耗を考えながら授業を楽しんだ

気になじめず、**周り**にあわせることがあった」「部活動のおかげで体力がつき、授業についていけたが、部活動の練習がきついため、体力の消耗を考えながら授業を楽しんだ」が学習態度の特徴だった。この文脈から、キーワードを「部活動の介入」「苦手な単元」「他者との関わり」「勉学との関わり」と命名した。

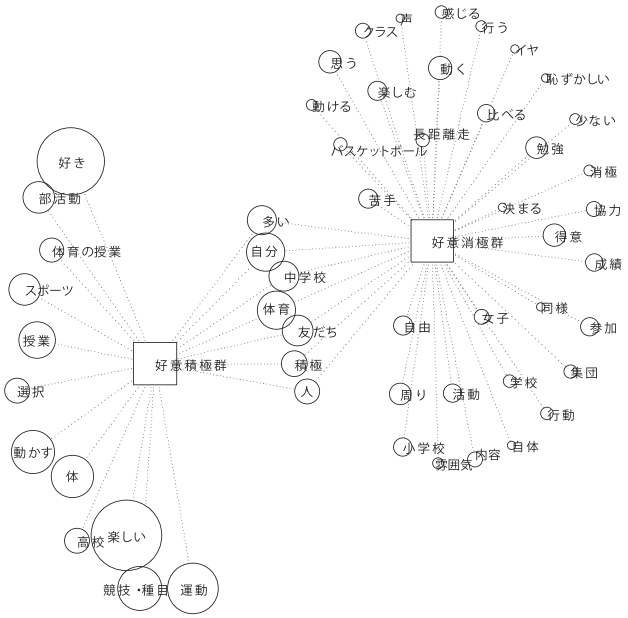

図３　両群を外部変数とした共起ネットワーク図（高校）

Ⅳ　考察

本研究は、大学生対象にアンケートを行い、運動・スポーツに好意的であったと回答した群に体育授業において「積極的な学習行動だった（好意積極群）」「消極的な学習行動だった（好意消極群）」の2群に分けて自由記述回答の計量テキスト分析を行った。この分析を小学校、中学校、高校別に実施した結果、体育授業に対する学習態度の理由が明らかになった。まず、定量的な検証として、両群のクロス集計の結果について考察を進める。小中高全てにおいて、運動・スポーツに好意的な者は、体育の授業にも積極的な態度で受けた者が多かった。相関係数からも強い正の相関関係があった。この結果は、好意や楽しさが積極的な態度と深く関係していると考えられる。スポーツ庁の調べ（スポーツ庁 2023c）でも、男女とも運動・スポーツをすることが好きと回答した者ほど、体育の授業が楽しいという回答が多かった。そして、体育が楽しいと体育の授業を進んで参加していることを明らかにしている[注3]。よって体育教育において、より積極的に授業に参加させるには、いろんな運動やスポーツの楽しさを共有した授業研究が必要になってくる。

運動スポーツが好きでも体育の授業態度が積極的な者もいれば消極的な者もいる。このような視点から先に述べた2群について、定性的な検証としてテキストマイニング分析を行った。その結果から得た概要を類型化しキーワードを導き出し命名した。表9は結果で述べた命名を一覧表にした

ものである。表9を参照しながら考察を進める。

始めに、小学校で見出された好意積極群の「学習内容」「教師の指導力」、好意消極群の「自己の能力」について検証したい。小学生の運動・スポーツが嫌いな理由の第1位が「体育の授業でうまくできない」と報告されている（スポーツ庁 2021b）。自己の能力を否定的な原因帰属におくと、学習性無力感につながる可能性があり（青木ら 2003）、今後中高へ進学して運動技術が高度化していくことを考慮すると小学校体育の学習内容にそった教師の指導技術が重要となる。大矢ら（2011）は、第3、4学年の児童を対象に小学校体育のうれしかったことに関する自由記述文をテキストマイニングし、注目語単語を分析した結果、達成体験、能力向上、称賛、共有感などが体育の肯定表現に結びついていると報告している。以上のことより小学校体育では、技術習得のための、分かりやすい言葉や、視覚的に理解できるような動きを施し、子どもたちの達成体験から得られる喜びを共有し称賛することが、好意的で積極的な学習態度に導く可能性がある。

中学校の好意積極群と好意消極群の両方に共通するキーワードとして「教師との相性」がある。生徒と教師との相性の良し悪しが学習の授業態度に影響を与えていた。松井ら（2021）の報告には、「教師は生徒の人格や性格を考えた指導をしていたか」「体育の授業以外に苦手意識のある生徒にスポーツを教えていたか」という問いに、体育好き群が体育嫌い群と比較して有意に評価が高いことを示した。この報告より教師の実技に関する指導力や生徒の特性を踏まえた指導の是非が、体育の好意非好意の要因となる可能性があり、学習態度の積極性に影響を与える可能性がある。次に「他者との関わり」は小学校の好意消極群を除いたカテゴリーにみられた。運動・スポーツをすることが好きな理由は小学校、中学校とも第1位が「友達や仲間と一緒に活動できる」だった（スポーツ庁2021b）。体育の授業では仲間と関係性が良好か否かによって主体的に動くかどうか分かれる。加えて、背景として思春期にある心身のアンバランスや、成長の個人差がみられる中、技術習得の遅れや周りの反応が敏感になっていることが推察される。例えば、不得意な児童・生徒にとっては集団競技のバレーボールやバスケットボールなどは、チームの雰囲気を過剰に察知したり、逆に気の置けない仲間においては積極的に活動を促したりすると思われる。両群において重要な他者となる仲間の存在が重要となろう。したがって、教師は生徒との良好な関係を構築したり、生徒同士がどのような関係性を持っているのかを把握することで、積極的な学習態度へ導く可能性がある。

「部活動の介入」は中高にみられ、好意消極群の小中高には「苦手な単元」、そして高校には「勉学との関わり」が関係していた。「部活動介入」に関しては、部活動により体力がついたという反面、部活動による体力の消耗が意欲低下を招いていたとある。中学校を対象にした調査の中で「体育の授業に進んで参加している」との問いと体力の総合評価の関連を示したデータを参照すると体育の授業に進んで参加している者は体力の評価が高かった[注4]（スポーツ庁 2021a）。部活動への参加は体力の向上が期待されることを考慮すると、部活動を本格的に開始する中学校では、トレーニング等の強度も強くなることから、体力の底上げがなされた可能性がある。部活動による体力の向上は体育授業に対する学習態度に積極性を高める可能性がある。続けて竹村ら（2007）の研究によると部活群は非部活群と比べて、課題志向性及び協同性が高いことを明らかにしている。部活動を通して、課題に向かって取り組む姿勢や他者との人間関係づくりの学びは、「苦手な単元」や先に述

べた「他者との関わり」にも活かされていると思われる。 また、中高生を対象にした部活動適応が学校適応感に及ぼす影響を、松村ら（2014）は、中学生では運動部が文化部に比べ、友人関係が良好で、問題を解決するスキルやコミュニケーション能力に通じる対人スキルといった「社会的スキル」が高いと述べている。次に石田ら（2006）は、中学校の部活動が学習意欲に及ぼす影響を調べている。運動部において、部活動の意欲を媒体に間接的に学習意欲へ影響を及ぼしており、部活動に対して意欲的であることは他の学習にも意欲的であることを報告している。部活動の介入は、必ずしも勉学の意欲を削ぐ負の側面だけでなく、他の学習に対する意欲向上や人間関係の構築にも役立っていることが考えられる。

また、高校生は大学受験を控えている者が多いため、体育がストレス解消にもなり、疲労につながる場でもあった。部活動や勉学を気にする生徒心理が伺えた。特に高校では「受験期へのストレス回避」といった学校種特有の観点も示している。

表９　各群における学習態度の理由から導き出した命名一覧

学校種	小学校		中学校		高校	
群	好意積極群	好意消極群	好意積極群	好意消極群	好意積極群	好意消極群
学習内容	●					
自己の能力		●				
教師の指導力	●					
教師との相性			●	●		
苦手な単元		●		●		●
部活動の介入			●		●	●
他者との関わり	●		●	●	●	●
勉学との関わり					●	●

Ⅴ　結語

本研究の調査対象者は大学生であり、自ら経験した各時代の体育授業を想起させている。本調査と近年の小中学校での体育に関する意識調査と比較すると「教師の指導力や相性」「他者との関わり」「苦手な単元」に関して類似した結果がみられた。今回の分析を通して、体育授業への主体的な参加態度の理由には、教師との人間関係を含めた指導力や協働的な学びが含まれており、主体的な参加態度を醸成するためには、これらが重要であることが示唆された。

中高に着目すると選択授業の開始によって、好きな単元を選択できることから苦手な単元が減り、授業へ参加意欲がみられた。体育の単元では、多種多様なスポーツを体験させ、生涯スポーツへつなげ、健康に寄与させることも念頭に置いている。未知のスポーツに挑戦させることも意義があり、それには、教師個々の適切な指導に留まらず、児童生徒達の人間関係までも目を配っていく必要があるだろう。技術習得がみられなくも、仲間の理解や協力によって、スポーツが好きで積極的な態度を導くことも指導力の一つといえる。

加えて中高生においては「部活動の介入」が特徴的な事項であった。先行文献によると部活動経験者は体力向上だけでなく、課題に取り組む態度や他者とのコミュニケーションスキル等、部活動介入による肯定的結果が散見され、体育授業への積極的な参加の一助となっていると推察した。この考察から部活動は全ての生徒に強制を持たないことから、非部活動生に視点をおいた授業研究は

今後の課題に数えてよいのではないか。そして、高校では体育が勉強の心理的ストレスからの解消となっていたことも興味深く、新たな研究の視点となった。

最後に今回の研究から体育の授業時における態度の参加理由を示したが、その特徴語から得た見解に対して具体的で効果的な授業のあり方までは示してはいない。また、性別による差異の検討も課題として残されている。本報告は研究資料の一つとして提示したい。

注

（注1）jaccard 係数の0.1以上を分析対象とした

（注2）Key Word in context の略で、抽出語の前後の文脈を見ることができる。文中の抽出語の部分は、太字と下線で示した。

（注3）先行研究に記載された質問1×質問9及び質問9×質問10のクロス集計結果から傾向を読み取った

（注4）先行研究に記載された質問10及び質問11のクロス集計結果から傾向を読み取った

付記

本報告は、九州体育・スポーツ学会第72回大会の一般発表会の内容を再検証し考察を加えた研究である。著者 TM は、データの分析と考察、論文草稿の作成を担当した。著者 YN、著者 KT および著者 AN は、データの解釈と考察に貢献した。なお、本研究は、著者 KT の着想に基づいて著者 AN が研究デザインを作成した。4名の著者は、原稿を批判的にレビューして論文を修正し、投稿を承認した。

引用文献

青木　高　太田壽城　監修　落合　優　石井源信　中島宣行　2003「健康・スポーツの心理学」建帛社 64-65.

樋口耕一　中村康則　周　景龍　2023「動かして学ぶ！はじめてのテキストマイニング」ナカニシヤ出版

星川　保　松井秀治　原　純雄　国富　猛　島川貞男　1990 「運動部活動が中学校の体力、運動能力に及ぼす影響に関する縦断的研究」体育科学18. 44-63.

石田靖彦　亀山恵介　2006 「中学校の部活動が学習意欲に及ぼす影響―部活動集団の特徴と部活動への意欲に着目して―」愛知教育大学実践総合センター紀要 9. 219-225.

松井高光　柳原朱里　久保田浩史　木村昌彦　山本耕太　橋口剛夫　長見　真　持田　尚　田村昌大　吉鷹幸春　岩沼総一郎　2021「体育に肯定的な印象を持つための授業づくり―アンケートによる過去の体育授業に関する実態調査から―」帝京科学大学教育・教職研究7. 1. 23-30.

松村宏馬　日下部典子　2014 「部活動適応感が学校適応感に及ぼす影響」福山大学こころの健康相談紀要8. 83-91.

大矢隆二　太田恒義　伊藤　宏　小木しのぶ　2011「小学校体育授業に対する好き嫌いと運動意欲の関連性および授業後の感想文のテキストマイニング」日本教科教育学会3. 1. 9-16.

澤井和彦　2019「運動・スポーツの好嫌度とイメージ」 子ども・青少年のスポーツライフ・データ2019 笹川スポーツ財団　33-39.

スポーツ庁　2018　スポーツ庁 WEB 広報マガジン DEPORTARE「好きを嫌いに変えるために～学習指導要領改訂小中学校・体育～」https://sports.go.jp/special/policy/new-curriculum-guideline.html

スポーツ庁　2021a「令和3年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書」第3章 基礎集計．P67. https://www.mext.go.jp/sports/content/20211215-spt_sseisaku02-000019583_3.pdf
スポーツ庁　2021b　前掲書　調査結果の総括．P9.
スポーツ庁　2022「令和4年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果」第1章調査結果の概要．P33. https://www.mext.go.jp/sports/content/20221215-spt_sseisaku02-000026462_5.pdf
スポーツ庁 2023a「令和5年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書」第1章調査結果の概要. P38. https://www.mext.go.jp/sports/content/20231218-spt_sseisaku02-000032954_12.pdf
スポーツ庁　2023b　前掲書　調査結果の総括．P17.
スポーツ庁　2023c　前掲書　第2章　基礎集計．56-57.
スポーツ庁　2023d　前掲書　第1章　調査結果の概要．P37.
竹村明子　前原武子　小林　稔　2007「高校生におけるスポーツ系部活参加の有無と学業の達成目標および適応との関係」教育心理学研究55．1-10.

参考文献

胡　泰志　古谷嘉一郎　梶田英之　2023「教科担当制が小学校教員志望学生に及ぼす影響―体育に着目して―」比治山大学 短期大学部教職課程研究　9．9-14.
今宿　裕　朝倉雅史　作野誠一　嶋崎雅規　2019「学校運動部活動の効果に関する研究の変遷と課題」体育学研究64　1-20.
稲田　愛　森　祐一　2023「テキストマイニングによる傾向・様相の分析」岡山理科大学経営とデータサイエンス5．41-53.
加藤　凌　佐藤善人　2023「中学校保健体育教師の男女共同体育に対する認識に関する一考察：体育教師の職業的社会化の視点から」スポーツ教育学研究第43号1．13-31.

付録

頻出語　（小学校）上位30語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
好き	191	小学校	11
楽しい	139	自分	10
動かす	106	先生	10
体	105	活動	9
運動	93	人	8
体育	38	遊ぶ	8
授業	36	頑張る	7
友だち	28	協力	7
スポーツ	18	積極	7
苦手	18	大好き	6
動く	18	跳び箱運動	6
競技・種目	17	取り組む	5
思う	13	成績	5
多い	13	遊び	5
得意	13	練習	5

頻出語　（中学校）上位30語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
好き	133	増える	16
楽しい	109	入る	15
運動	96	バレーボール	14
動かす	57	先生	14
体	54	動く	14
部活動	46	思う	12
競技・種目	30	多い	12
授業	30	得意	12
体育	29	バスケットボール	10
友だち	27	参加	10
小学校	23	人	10
スポーツ	22	成績	10
苦手	18	活動	9
積極	18	協力	9
体力	17	少し	9

頻出語　（高校）上位30語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
楽しい	133	高校	17
好き	121	人	17
運動	68	選択	17
体育	53	動く	14
競技・種目	52	思う	13
授業	51	得意	13
動かす	49	周り	12
体	47	先生	12
自分	39	息抜き	12
部活動	27	勉強	12
スポーツ	26	楽しむ	11
友だち	25	時間	11
中学校	24	クラス	10
多い	22	苦手	10
積極	18	自由	10

（みやひら　たかし：人間科学科　教授）
（のだ　ゆうじ：中村学園大学　助手）
（つつみ　こういち：佐賀大学　准教授）
（にしだ　あきひと：中村学園大学　准教授）